

平成25年度京都型農林業プロジェクト有識者会議等の結果概要

平成25年度の京都型農林業プロジェクトでは、農・林・水産業のうち、林業及び水産業を対象として、身近に自生する林産資源の新たな活用方法の検討や、市民に身近な鴨川で漁獲される水産資源の復活の検討を行った。

林産資源（山）は、京都の森林にも比較的多く自生し、特に京北の合併記念の森に多く見られるクスノキ科の落葉低木「京北産クロモジ」を選んだ。クロモジは薬用植物であり、材は高級楊枝に加工して利用されている。

また、水産資源（川）は、市内の川に多く生息し、冬に旬を迎えるオイカワ（ハエ）を選んだ。特に鴨川のオイカワの稚魚は、「鷺知らず」と呼ばれ、現在は見られなくなったが、かつては醤油などで炊いたものが京土産として売られていた。

これらの活用に向けて、現状と課題を把握するため、それぞれの活用実証調査を実施することとし、クロモジは、合併記念の森でクロモジの活用先進的に取り組んでいる樹々の会へ、鷺知らずは、鴨川の水産資源の増殖に取り組んでいる賀茂川漁業協同組合へ委託した。以下に、有識者会議や現地調査の概要をまとめる。

■第1回京都型農林業プロジェクト有識者会議

日 時 平成25年12月6日（金）午後3時～午後5時
場 所 本能寺文化会館 西館5階「雁（かりがね）」
出 席 者 委員、樹々の会、賀茂川漁業協同組合
意 見

【クロモジ】

- 試飲したが美味しい。様々な加工が考えられるが、例えば、葉の粉末化ができないか。
- 実際のクロモジを知らない人がほとんどであり、クロモジファンを増やすことが重要である。

【鷺知らず】

- 北大路魯山人の書に登場することや鴨川で古くから漁獲されていたことなどのストーリーはメリットとなる。
- 鴨川の資源量が少なければ桂川も含めた京都産という商品提供を考えていくべきか。
- 資源量が少なければ、値段では勝つことができない。
- 鷺知らずの食文化の再生によって、川の環境改善に市民の目を向けられればと思う。



■「鷺知らず」生息環境・採捕状況調査，アンケート調査及び意見交換

日 時 平成26年2月12日（水）午前9時～正午

場 所 【現地視察】鴨川左岸 団栗橋付近 京都水族館山紫水明ゾーン
【意見交換】京都水族館 会議室

出席者 委員，賀茂川漁業協同組合，京都水族館職員

意 見

- 鷺知らずを採捕するところを見せるとともに，その後で料理として提供するようできないか。
- 増水に伴い流下したオイカワが，川の落差工の存在で遡上できないために生息域が偏っている。
- カワウの食害が全国的にも深刻な問題となっている。当地では釣り人による追い払いによって資源が守られている。
- 京都市の食文化の1つのシンボルになる。
- 漁期（現在12月末までとなっている。）に限定漁師のみが漁獲するなど，漁法の詳細な取り決めが必要である。
- 市民に鴨川の魚を食べてもらうことに意義がある。

※京都水族館では約100名の試食アンケートを実施した。

- ・知らない方が大半。いやな味との回答は無かった。
- ・鴨川に漁協があることや，食べられる魚が棲むことは知られていない。



■「クロモジ」現地視察及び意見交換

日 時 平成26年3月7日（金）午前11時～午後3時30分

場 所 【現地視察】合併記念の森
【意見交換】道の駅ウッディー京北 研修室

出席者 委員，樹々の会

報 告

樹々の会で採集や加工・栽培を行っているが商品化のための資金集めは難しく商工業との連携は話がまとまっていない。なお，市内の大学生に商品ラベルのデザインをお願いしている。

意 見

- 複数の完璧商品を求めるよりも法規制ハードルも低いクロモジ茶の商品化からでも始めてはどうか。
- 綾部市古屋のトチへの京都生協の取り組みは限界集落支援という「正義」を高く掲げて組合員から支持を得ている。
- 最近は急須はあまり使わない。ティーパックが良い。入浴剤はどうか。
- 売価の一部が合併記念の森の植樹に使われるとかの仕掛けも必要か。
- 商品の向こうにどれだけの「森」が見えるのか，物語性が大切である。
- 合併記念の森で行われている市民協働活動にクロモジを活用させるべき。



■第2回京都型農林業プロジェクト有識者会議

日 時 平成26年3月20日（木）午後2時～4時30分
場 所 本能寺文化会館 西館4階「櫟（けやき）」
出 席 者 委員，樹々の会，賀茂川漁業協同組合

▼事業規模（年間販売額）を推定し，取り組みの大きさをまず把握した。

【クロモジ】

製茶に適する新芽の時期は年間10日程度。実績データではその10日間の内の4日間をのべ27名で作業を行い，約10kgの製品を作った。仮に10日間フル作業を行えば，25kgの製造は可能。1袋200gの商品とすると，125パックが可能。さらに全会員が従事できれば360パックの製品が可能。

1パック1,000円とすると36万円となる。

【鷺知らず】

1日500尾程度が採捕の限度で，その4割が鷺知らずの大きさと仮定すると200尾／日。漁期を80日間とすると年間1万6千尾が採捕可能な鷺知らずの数量である。500尾で1商品（個）とすると320個の製品が可能。

1個500円とすると，年間16万円となる。1千円／個としても32万円である。なお，漁獲量の年変化は著しい。

▼意見交換

- クロモジは次年度の農商工連携事業に申請し，商品化に向けた取組展開をしてはどうか。
- 「合併記念の森」での下刈りなどはたいへんな作業であるが，森に関心を持ち，森を守る活動に参加したい市民は多くいる。
- 活動の方法はいくらでもあるから，マイタケ生産や草刈り体験も含めた年間スケジュールを作り，若い樹々の会員が増やすことが必要である。
- 鴨川の資源の枯渇や環境の悪さを市民に伝えるために「鷺知らず」を使うのは良い方法である。
- 利益を求めないということであれば，市民協働の河川清掃活動のお礼にも使える。
- 京都水族館で販売ができれば望ましい。
- 鷺知らず以外にも目を向けて，少量多品目のアピールをしてはどうか。